

98歳

弁護士 相沢英之

自分を貫いて生きる

その半生において行政、立法、そして司法の三権すべてに関わってきた人物がいる。九十八歳のいまも現役の弁護士として活動する相沢英之氏だ。戦後、ソ連に抑留されること三年。後に国家の中核に身を置きつつ、生かされた命を燃やし続けてきた相沢氏の足跡をお話しいただいた。



あいざわ・ひでゆき——大正8年大分県生まれ。昭和17年東京帝国大学(現・東京大学)法学部政治学科卒業。48年大蔵省事務次官、51年衆議院議員初当選。9回当選の後、平成15年引退。17年弁護士登録。勲一等旭日大綬章受章。全国強制抑留者協会会長。著書に『ボルガは遠く』(ぶんか社)など。

九十八歳現役の弁護士

相沢さんは大蔵省(現・財務省)で二十六年、さらに衆議院議員を二十八年間務められた後、弁護士として今日に至るまで活動してこられたそうですね。

相沢 議員を引退した二年後に、八十四歳で弁護士登録をしましてね。もうすぐ十五年が経ちますが、土日は世間並みに休みますけど、

いまも平日は西麻布の事務所に出て仕事をしているんですよ。
——主にどういった案件を手掛けてこられたのでしょうか。
相沢 弁護士になってしばらくは国選弁護を引き受けなければいけないというので、麻薬に関する事件を三件ほどやりましたが、これが結構骨が折れましたね。留置所まで行って被疑者に一から話を聞かないといかんですが、話を聞いてみるとどれも似たような過程を辿って麻薬を常習するようになっているんですよ。

結局、最後は麻薬をやめようと新宿の交番に自首するわけですが、彼らは刑務所に入れてほしいわけでしょう。ところが弁護士としては、「しばらく刑務所に入れておいてくれ」という弁護ができるかといったら、どうもできない。
——弁護士という職業柄、難しいでしょうね。

相沢 たとえ有罪になっても、執行猶予をつけてくれるよう働きかけなければいけません。でも、それは本人の意思に反するわけでしょう。これには、商売柄いろいろと考えさせられました。
あとは大蔵省時代に予算の仕事

をやっております。現に税理士の資格もありますので、税金の仕事はいくつか手掛けてきました。他にも議員をやっていたことから会社関係の仕事もいろいろとありましたね。

——いまもお元気で仕事をされている秘訣は何でしょうか？
相沢 私がいつも言っているのは、例えば昨日のことも去年のことも過ぎてしまったことは二度と帰ってこないんだから、なんぼ後悔しても仕方がない。それよりは、将来に向かって自分はどういうことをしようと考えていることのほうが大事だ、と。

弁護士という職業は比較的いろいろなことが出来ますから、その中から将来に繋がる仕事を見つけていく。よく言えば、社会奉仕ですね。世の中のために、いくらかでも役に立っているという気持ちでいたいという思いが、いまの私の原動力になっています。

戦地を生き抜く

——そういった思いは、若い頃からお持ちだったのでしょうか。
相沢 志ということからすれば、

小学生の頃、佐藤紅緑の少年小説『あゝ玉杯に花うけて』を読んで、主人公の青木千三のように第一高等学校を卒業して大蔵省に入りたいなと思ったことは事実ですね。

ところが実際に一高から東京帝国大学を経て、昭和十七年九月に大蔵省入省が決まったものの、時を置かずして陸軍に第一乙種で徴兵されました。陸軍東京経理学校での訓練を終え、陸軍主計見習士官として中国の北支方面軍司令部への転属が決まったのは、終戦の一年前のことでした。

最初は飛行場建設に回されたのですが、その途中で今度は中支の漢口への転進が決まると、待っていたのは物資の買収と輸送でした。

——物資の買収と輸送。
相沢 ええ。というのも昭和十九年にもなると日本軍は制空権を失っていて、そうなるとう然制海権もない。ですから南方で物資を確保しても、それを日本まで運ぶ能力がなかったんですよ。そこで陸軍に物資を運ぶわけですが、米空軍の執拗な空襲に遭って、なかなかうまくいかない。
私は主に屑鉄や非鉄金属などの買収をやっていましたが、揚子江

を使ってそれらを運ぼうにも、大きな船はあらかじめ沈められていてもうありません。そこで現地で海洋ジャンクなどをかき集めること、何とか任務を全うしました。

——そうこうしているうちに、翌年六月には北朝鮮の咸興への転進が命じられました。二か月後には終戦を迎えるわけですが、現地ではソ連軍の侵攻に備えて、山籠もりをするため天幕二万張り分、毛布七十万枚など準備などが進められていました。

——既にソ連軍が侵攻してくることを予見していたわけですね。

相沢 そうですね。ただ、私がおかしいと思ったのは、当時の軍部がアメリカやイギリスとの停戦の仲介を、同じ連合国軍ソ連に頼んでいたことです。そんなことをしたら、「日本はもうお手上げだ」と告白するようなものです。ソ連にしてみれば、このまま黙って見ていられるだけでは分け前をもらえなくなるに焦ったんでしょうね。終戦前にドンパチ始めたわけですが、これは完全な空き巣狙いですよ。それに対して関東軍から我われに下った命令は「ソ連軍に抵抗しつつ、次第に後退せよ」という面

妖なものでした。これには日本の降伏も近いのではないかと、という思いがよぎりましたね。

「ダモイ、トーキョウ」の嘘

——相沢さんはどちらで終戦を迎えられたのですか？
相沢 北朝鮮の咸興です。もっとも終戦から一週間くらいはソ連兵を見ることもなく、この先どうなるのかという不安はありましたけど、わりと平常に近い生活を送っていました。

その後、我われ日本軍は鉄道沿線に駐屯し、在留邦人が全部引き揚げるまで警備にあたり、軍人は一番後で引き揚げるという協定がソ連軍との間に結ばれたという説明がありました。十月の終わり頃にはいいよ内地に帰還できるといふ話が流れてきました。興南の港で汚い貨物船にギッシリと詰め込んで乗せられたのですが、これは何かおかしいぞ、と気づいたのは二日目の夜のことでした。
——どういうことでしょうか。
相沢 北斗七星が船の右舷に見えるようになったんです。日本に向けて走るなら、北斗七星は左舷に

選挙演説に立つ相沢氏



特に印象に残る政治家はいら

一日生涯に生きる

私はずっと国家予算に関わる仕事をしてきました。さすがに十年もやっていると、金融財政をやりたいという気持ちもあったのですが、結局二十六年間一貫して予算ばかりやってきたんです。

それくらいやっていると、各省の担当者ともだいぶ親しくなりましてね。私が主計官の時には、相手の省の官房長が訪ねてきて、「これでどうでしょうか」と人事のことを相談されたこともありまして。

つしやいますか。

相沢 「日本列島改造論」を掲げた田中角栄さんはやはり非凡な方でした。とにかく角さんとは予算のことで、相当激しい議論もしました。

ただ、角さんの場合は、議論の末に自分の計画を引っ込めざるを得なくなった時でも、後を引くようなことが一切なかった。一度は議論がヒートアップして、「俺は大蔵省のことは隅から隅まで知っているんだ。大蔵省をぶっ潰してやる」なんて言われて、その時には五時間くらい話し合いが続ぎ、結局はこちらの言い分どおりになった時も角さんは全く後を引きませんでした。

——懐の深い方だったのですか。

相沢 それに角さんがすごいところは、ただ単に「予算をつけろ」と迫ってくるのではなく、きちんと財源を考えていたところでした。例えば、道路をつくるには「車両重量の重い車種には税金を増やせばいい」というので重量税を考え出したのも、角さんご本人でした。あとはとにかく自分で決めたことは最後までやる。こういったことは、やはり実業家出身だったこと

が大きいのだと思いました。

角さんには大蔵省の事務次官を退任後、「都知事選に出ろ」と誘われたこともありましたが、出るとすれば国政にの思いが強かったので断ったんです。

——なぜ、国政への思いが強かったのでしょうか。

相沢 役所の仕事は法令の範囲内という限度があるわけで、自分としてはそうした法令の問題点を是正したいという思いがありました。それに自分も予算を配分する側から、実際に予算をつくる側に回りたいという気になったのも事実ですね。それが政治の世界に入りたいと思うきっかけでした。

おかげさまで議員立法を三十件実現することもできましたし、約二十八年の議員生活では経済企画庁長官といった閣僚なども務めさせていただくなど、存分に活動することができました。

——相沢さんは行政、立法、そして司法の三権すべてに関わってこられたわけですが、どんなことを心掛けてこられましたか？

相沢 一つは自分が納得できないことは、徹底的に話し合うなどして、簡単には折れずに頑張りとお

すことです。もちろん、そういうことをしていると、上司や周囲の人たちから悪く言われることもあります。でも自分の筋を通す。

これは先ほども申しましたが、戦争に連れていかれ、おまけにソ連にまで連行されたがら生きて帰ってこられたことが非常に大きいです。それもあって、いつも自分に言い聞かせてきたのが、「一日生涯」という言葉でした。

——一日生涯。

相沢 その一日を自分の生涯だと思って、充実して生活すること。私はこれが一番大事なんじゃないかと思っています。

少し大袈裟に言えば、自分は戦争で死にかけたわけでしょう。そして厳しい環境の中を何とか生き抜いてきた。「あいつはまだ生かしておいてやろう」という天の配剤だったのかもしれない。

それだけに自分がいまもこうして生きていることの意味を考えると、せめて生きているうちはどんな小さなことであっても、自分の納得する生き方というものを持っていていくべきではないかと思っています。

見えるはずでしょう。仲間内ではだんだんと騒ぎが大きくなりましてけど、ソ連兵は「ダモイ（帰国）、トキヨウ」を繰り返すだけ。

結局、船から降ろされた港はソ連の軍艦が何隻も並んでいるポシエツト軍港で、それから一か月もしないうちに今度は貨物列車に詰め込まれ、シベリア鉄道に揺られること二十三日。ようやく停車したのがキズネルという田舎の駅で、さらに三メートルもの雪の中を行軍すること四日。辿り着いたのはエラブガというボルガ河の支流にある小さな田舎町にあるラーゲル（収容所）でした。

——そんなに遠くまで連行されてしまったと。

相沢 こうなると日本に戻るあては全くなし。ラーゲルでは年に二、三枚はハガキを日本に送ってもよいことになっていましたが、私は腹が立つものだから全然出さなかった（笑）。それにラーゲルにはドイツ軍将校もかなり収容されていたのですが、何かにつけて威張っているわけですよ。他にもハンガリーやルーマニアの将校もかなりいましたけど、彼らは口々に文句を言っていました。「何だよあいつら、戦争が終わってもまだ威張ってやがる」って（笑）。

でもそこは、一つには戦争で勝ったり負けたりしてきたヨーロッパ諸国と、負けることに慣れていない日本との差でしょうね。彼らは戦争に負けても「この野郎、いつか仕返ししてやるぞ」と思っているわけですが、日本人は生きて辱めを受けるなという考え方ですからね。

結局、ラーゲルでの強制労働や四か月の独房を含めて抑留は三年に及び、日本に戻ってきたのは昭和二十三年八月十四日のことでした。ただ、ソ連兵から日本に戻れることになったと告げられても、舞鶴の港に実際に上陸するまでは全然信用していませんでした。

——また騙されるかもしれないと。

相沢 ええ。彼らは嘘つきだった。本当にそうなんです。だから「舞鶴に向かっている」なんて言われても、みんなで「騙されるな」って言うていましたからね（笑）。

予算一筋二十六年

——日本に戻られて、すぐに大蔵省に復職されたのでしょうか。

相沢 役人になった途端にこんな目に遭うんだったらもうやめにして、小説家になろうと思っていた。というの、私は若い頃から小説が大好きで、本当は作家になりたかったんです。

ただ、さすがにあの時代に文章だけで食べていく自信はなく、在学中に司法試験に合格していたこともあって、弁護士になろうと固く決意していたんです。

——なぜ、その決意が覆ったのでしょうか。

相沢 自宅に帰った翌々日に大蔵省に挨拶に出掛けて行くと、「おまえ、せっかく帰ってきたんだから、待遇を同期と一緒にしてやるからな。明日から来い」と言われましてね。そのひとりでグッとときた（笑）。人間の決心なんていい加減なものです。弁護士になろうというの、帰りのシベリア鉄道に揺られながら毎晩考えた末のことだったのに、コロッと変わってしまった。それですぐに京都の下京税務署長への就任が決まると、半年も経たないうちに今度は主計局のポストが一つ空いたというので、上京することになりました。

——ところがそれからが大変で、G

HQ（連合国軍最高司令官総司令部）からの命令で大所帯だった逋信省が、郵政省と電気通信省に分割されることになりました。とにかくすぐにやれということで、人員の割り振りを任されたわけですが、これは絶対に採めるという予感を感じていました。

早速、両省の経理局長を呼んだところ、「相沢さんに任せろ」と言うんです。いざ分割案を出すのと、両省からもっと人員をよこせと言う。さらにGHQからも横槍が入ってきました。

——それでどうされたのですか。

相沢 GHQ幹部との折衝を繰り返しましたが、なかなか決着がつかない。それなら彼らが機嫌のいい時に乗り込もうと、クリスマス晩に司令部の連中がパーティーをしているところに押しかけていって、「うん」と言わせました。

——勇気の要ることですね。

相沢 向こうはぶつぶつ言っていましたけど（笑）。まあ、こうしたことができたのも、ソ連の地で酷い目に遭って帰ってきたからだと思っただけです。腹が据わっていたというか。

その後も大蔵省主計局にあって、